

コンスタンチノーブルのロシア商館

福田 千津子

1147年9月、コンラート三世配下の十字軍兵士たちは、餓えに苦しみながら、スクタリから対岸に向けてボスフォロス海峡を渡った。その模様をビザンツの作家テオドル・プロドロムは、次のように記している。「彼らは、＜聖ママス＞を目指していやいや海峡を渡った。それからずっと、彼らは聖ママスを求め続けている。彼らは手探りでママスを捜し、その名を呼んでいる。聖ママスは姿を見せず、彼らは餓えている。おまえたち、聖ママスの僧たちよ、この十字軍兵士たちを前にして恥じいることはないのか。おまえたちがおまえたちの聖人に対してより彼らははるかに忠実なのだ。彼らは海の対岸から声をあげ、第七頌歌の祈願を歌っている。彼らは両手をあげて、聖ママスに向かって叫んでいる。『聖ママスさま、我らはあなたの足元に身を投げ出しております。我らは崇めております。姿をお見せください。そうすれば我らはあなたにつき従います。我らはあなたのお顔を捜しております。我らを辱めないでください。聖ママスさま＞』。この記述が、本稿でとりあげるコンスタンチノーブルのロシア人居住区として用いられる＜聖ママス＞に関する最後の情報である¹。

この記述に先立つこと約150年、ウラジーミル公は、黒海に突き出たビザンツの要地ケルソネスにおいてキリスト教に改宗し、ビザンツ皇帝バシレイオス二世の妹アンナを娶った。988年のことであった。そして、これを機に、ロシアはキリスト教を国教として受容したとされている。もちろん、この時初めてルーシの人々がキリスト教を知ったということではない。それに先立つ957年に、イーゴリ公妃オリガがコンスタンチノーブルに赴き、時のビザンツ皇帝コンスタンチヌス・ポリュピロゲネトスを代父としてキリスト教の洗礼を受けた時のエピソードは広く知られている。さらに、864年頃、コンスタンチノーブル奇襲に驚いたビザンツ総主教フォティオスは、ルーシの

¹ R.P.Pargoire, "Saint-Mamas, Le quartier des russes à Constantinople", *Echo d'Orient* XI, 208.

地に宣教師を派遣して東スラブの布教活動にあたらせている。その結果、個人のレベルでは、9世紀後半にはキエフの地にも洗礼を受けた者が現われていたということは想像に難くない。また国家のレベルでも、10世紀半ばにはキリスト教がしっかりと根を下ろしていたということは、有名な『原初年代記』の記述からも窺い知ることが出来る。すなわち、907年にビザンツと締結したオレーグの条約についての記述では、

Царь же Леонъ со Олександромъ миръ сотвориша со Олгомъ имшеся по дань и роть заходивше межы собою, целовавше сами крестъ, а Олга водивше на роту и мужи его по Рускому закону, кляпаса оружиемъ своимъ, и Перуномъ, богомъ своимъ, и Волосомъ, скотшемъ богомъ, и утвердиша миръ

(ツァーリ・レオンおよびアレクサンドルは納貢に同意し、オレーグと和平を結び、自らは十字架に口づけをし、オレーグとその家臣たちはルーシの掟に従い、おのれの武器をもって、おのれの神ペルーンにかけて、また家畜の神ヴォロスにかけて誓い、和平を確認した)²

とされている。それに対して、944年に締結されたイーゴリの条約では、コンスタンチノーブルに遣わした使者たちが戻った後、

Заутра призва Игорь слы, и приде на холмъ, кде стояше Перунъ, и покладоша оружие свое, и щиты и золото, и ходи Игорь роть и люди его, снико поганыхъ руси; а хрестеяную русь водина роть в церкви святого Ильи, яже есть надъ Ручасмъ, конецъ Пасынчъ бѣсѣды, и козаръ : се бо бѣ сборная церки

(翌朝、イーゴリは使者たちを呼び、ペルーンの立っている丘に行った。そして自分の武器と盾と黄金を供え、イーゴリと異教徒であったその家臣はすべて宣誓をした。一方、キリスト教徒であるルーシたちについては、パスインチャ・ベセダ地区の小川のほとりにある聖エリヤ教会に連れて行って宣誓をさせた。というのは、これは、本教会であったからであ

² Л.С.Лихачев, Л.А.Дмитрисъ, *Памятники Литературы Древней Руси, XI-начало XII века*, М., 1978, 46.

る)³

と記されている。すなわち、オレーグの条約締結時には、ルーシの側は、全員が異教の神に誓っているのに対し、イーゴリの条約締結時には、イーゴリは異教を信奉しているが、家臣の中にはキリスト教徒が含まれていて、その者たちは聖エリヤ教会で宣誓をするということが明確にされているのである。このことから、オレーグの条約からイーゴリの条約にいたる半世紀の間にキリスト教に改宗したものがかなりあり、イーゴリの条約が締結された時には、ツァーリの周辺にも多数のキリスト教徒たちが出現していたことが明らかになる。さらに、エリヤ教会で宣誓を行ったのは、「これが *сборная церкь* (本教会) であったためである」という記述は、このキエフの町に他にもいくつかの教会がすでに存在していたということを裏書きするもので⁴、キリスト教がかなりの程度まで浸透していたことを窺わせる。しかもこの変化が半世紀足らずという短期間の間に起こった変化であり、このような短期間に上記のような状況が生まれた背景には、ビザンツから多数のキリスト教文献がスラブ語に翻訳され、この地にもたらされていたという事実があることを無視することはできない。

それでは、それらの文献はどこから持ち込まれていたのだろうか。当時のキエフ・ルーシとビザンツの接触経路としては、先ず、ブルガリアを通じての接触が考えられる。周知のように、ブルガリアはロシアより一足早くキリスト教を受け入れていた。864年に受洗したとされるボリス汗は、885年にメトディウスが死んだ後モラヴィアから追放されたスラブ語による典礼を行う聖職者たちを、ドナウ川に沿った地域に積極的に迎え入れ、スラブ語典礼の完成とギリシャ語教会文献のスラブ語への翻訳作業に従事させた。さらに、その子シメオン(在893-927)は父ボリスの事業を継承し、さらに一層発展させて、ブルガリアの文化的全盛時代を築き上げた。ルイバコフは当時のブルガリアとキエフ・ルーシの接点として、ドナウ下流域の<ルーシの島>と黒海沿岸のコンスタンツとヴァルナの間の地域を挙げているが⁵、これらの地でスラブ語に翻訳された教会文献は、同時にキエフ・ルーシへも運ばれ、ルーシのキリスト教受容に大きな影響を与えたであろ

³ Д.С.Лихачев, Л.А.Дмитриев, *op. cit.* 68.

⁴ Рыбаков, Б.А. *Киевская Русь и Русские княжества*, М, 1982, 367.

⁵ Рыбаков, Б.А. *op. cit.* 368.

うことは容易に想像できる。

しかし、これとは別に、ビザンツとキエフ・ルーシが直接接触する経路も存在していた。

『原初年代記』に記されている907年のオレーグとビザンツ皇帝レオンおよびアレクサンドロスとの間に締結された講和条約の中で、ロシア商人に関して次のような規定がなされている。

а иже придуть гости, да емлют мѣсячину на 6 мѣсяць, хлебъ, вино, и мясо, и рыбы и овоць. И да творят им мовь, слико хотят

(商人がやって来ると、彼らは6箇月の間、月々の割り当てを受け取る：すなわち、パン、ワイン、肉、魚、果物である。そして、望むだけ、入浴の便宜を与えられる)⁶

Приходяще русь да витают у святого Мамы, и послеть царьство наше, и да испишут имена их, и тогда возмутъ мѣсячное свое, - первое от города Кисва, и паки ис Чернигова и ис Переславля, и прочии гради. И да входят в град одними вороты со царевымъ мужемъ, без оружья, мужь 50, и да творят куплю, якоже им надюбе, не платяче мыта ни в чем же

(ここにやって来るルーシたちは聖ママスのもとに居住し、皇帝は彼らの名前を書き留めるために人を遣わす。その後、かれらは月々の割り当てを受け取る。まず、キエフ、つぎにチェルニゴフ、ペレヤスラヴリその他の町の人々が。彼らは皇帝の役人の付き添いのもとに、一つの門から50人ずつ、武器を持たずに町に入る。そして、いかなる税も払わずに必要なに応じて商いを行う)⁷

945年にも、同様の協定がロマヌス1世とイーゴリ大公の間に締結されている。

Да запрѣтитъ князь словъ своимъ и приходящимъ руси сле, да не творять бепцинья в селѣхъ, ни въ странѣ нашей. И приходящимъ имъ, да витають у святого Мамы, да послеть царство наше, да испишеть имена ваша, и тогда возмутъ мѣсячное свое, съли

⁶ Д.С.Лихачев, Л.А.Дмитриев, op. cit. 44.

⁷ ibid. 44-46.

слабое, а госте мѣсячное, первое от города Кіева, накі изъ Чернигова и ис Переяславля, и исъ прочихъ городовъ. Да входятъ в городъ одинѣми ворота со царевымъ мужемъ, безъ оружья, мужъ 50, и да творятъ кушю, якоже имъ надобѣ, и накі да исходятъ; и мужъ царства нашего да хратитъ я, да аще кто от Руси или от Грекъ створитъ криво, да оправляетъ то. Входяще же русь въ градъ, да не творятъ пакости и не имѣють волости купити паволокъ лине по 50 золотникъ; и отъ тѣхъ паволокъ аще кто крынетъ, да показывасть цареву мужю, и тѣ я запечатасть и дасть имъ. И отходящи руси отсюда взимають от насъ, еже надобѣ брашно на путь, и еже надобѣ лодьямъ, якоже уставлено есть преже, и да возвращаются съ спасениемъ въ страну свою; да не имѣють власти зимовати у святаго Мамы

(公はその使節およびルーシたちに対して、我が国の町においてくれぐれも行き過ぎた行為の無いように命ずる。彼らは到着すると聖ママスに行き、皇帝は彼らの名を記すために人を遣わす。彼らは月々の割り当てを受け取る。使節団は使節団のものを、商人は月々の割り当てを。まず、キエフ、つぎにチェルニゴフ、ペレヤスラヴリその他の町の人々が。彼らは一つの門から50人ずつ、皇帝の役人と共に、武器を持たずに入り、必要に応じて商売を行い、そして戻ってゆく。皇帝の役人は彼らを保護し、もしルーシあるいはギリシャ人が騒ぎを起こせば、それを是正する。ルーシは、町に入るときに、50ゾロトク以上の絹布を買ってはならない。そして購入した布は役人に見せなければならない。そして役人はそれに封印して渡す。ルーシたちが帰るときには、必要なものをすべて我々から受け取る。先に定めたとおりに、帰路の食料と船に必要なものを。彼らは聖ママスで越冬する権利は持たない)⁸

ここに記されているキエフ・ルーシとビザンツの通商条約の規定は、この頃、すなわち10世紀に、ロシアからいわば公的な通商使節団が定期的にコンスタンチノーブルを訪れ、大規模な商業貿易を行っていたことを示している。

⁸ ibid. 62.

また、ここで言及されている通商使節団は、オレーグによって制定された巡回徴貢と密接に関連している。クリュチェフスキーによると、11月になると、ルーシの諸公は従士団と共に巡回徴貢のためにキエフを出発し、スラブの地で一冬を過ごした後、ドニェプルの氷が融ける4月に再びキエフに戻るが、「諸公とルーシが支配下の国々をまわっている間に、ルーシに貢税を納めていたスラブ人は、冬中木を伐って丸木船を作り、川開きの春になるとドニェプルとその支流によってキエフに流送し、それ河岸に引き上げて、満水によって巡回徴貢から帰ってきたルーシへ売却した。買入れた船を装備して荷積みしたルーシは、6月にはそれに乗ってドニェプルをヴィチチェフに下り、そこに数日間滞在し、商人の船が同じドニェプルによってノヴゴロド、スモレンスク、リュベチ、チェルニゴフ、ヴィシゴロドから集まってくるのを待った。それから、一同はドニェプルを下り、コンスタンチノーブルをめざして黒海へ向かった」⁹。このように、ルーシの公と貴族からなる通商団に一般商人を加えた大武装商船団は、途中、南ロシアのステップに現われるペチュネグ人たちの襲撃を避けながらコンスタンチノーブルへ到着した。彼らは交易品として、巡回徴貢でスラブ人諸民族から集めたキャビア、毛皮、蜂蜜、蠟、魚などをコンスタンチノーブルに運び、引き換えにビザンツから馬、香辛料、シルク（これは再貿易にも用いられた）、ワイン、硝子製品、金属細工を入手してキエフに戻った。

これらの通商団に対してビザンツ側は入国税を免除したうえで、滞在中の食料および入浴場所を提供し、さらには帰国にあたっては必要な備品の提供も行っている。外国人商人に対する待遇としては、当時コンスタンチノーブルに六万人位在留していたとされるヴェネツィア人を中心とする外国人商人たちと比べてはるかに優遇されたものである¹⁰が、その一方で、コンスタンチノーブルの城砦内への入城は厳しく管理されており、滞在中は決められたロシア人専用の居住区に住むことが義務づけられていた。この厳しい管理は、「11世紀半ばまでは、外国商業は支配者階級自らの仕事であった」¹¹とされるように、この通商団が公的な色彩の濃厚な通商使節団であり、しかも度重なる

⁹ B.O.クリュチェフスキー、『ロシア史講和』八重樫 喬任訳、東京、184.

¹⁰ Tamara Talbot Rice, *Everyday Life in Byzantium*, NY, 1967, 140.

¹¹ 石戸谷 重郎、「ロシア・ビザンツ条約とその背景」『奈良学芸大学紀要』第四巻第三号、106.

スラブの侵攻に神経を尖らせていたビザンツの警戒心を起こさせるほどの規模（おそらくは数百人単位）の大武装集団であったという事実を反映している。

ここで、『原初年代記』の中に「ロシア人専用宿舎」として滅給されている＜聖ママス＞の歴史について少し考察しておこう。それは、469年、大火で首都を追われたレオン一世がこの地区に避難し、6箇月間にわたって滞在したとされる史実に遡る。この時、港が建造され、ヒッポドローム付きの宮殿が建設されている。また、この地区に＜聖ママス＞の名にちなんだ修道院があったことは、冒頭にあげたビザンツ作家テオドル・プロドロムの言葉からも明らかであるが、＜聖ママス＞という語は修道院だけではなく、ヒッポドローム付きの宮殿および港をも含む特定の地区一帯を指しているものであろう。

レオン一世の後には、いくつかの軍事的な出来事に絡んでこの地名への言及が見られる¹²。また歴代のビザンツ皇帝に関しても、コンスタンチヌス五世、コンスタンチヌス六世、皇后エレーニなどのように、折りにふれてこの宮殿に滞在したという話が伝えられている。なかでもコンスタンチヌス五世は、巨大なヒッポドロームのあるこの地区をこよなく愛していたといわれている¹³。

ビザンツの年代記によると、867年9月23日夜から24日にかけて、ミハイル3世は、この＜聖ママス＞においてバシリウス一世によって暗殺された。この記述を最後に、ビザンツ側資料中での＜聖ママス＞への言及は姿を消してしまう。

＜聖ママス＞の名がその後再び登場するのは、先に引用したロシア側資料である『原初年代記』の907年および944年の項である。さらに、957年にコンスタンチノーブルで受洗したオリガもこの居住区に逗留したと推察される。というのは、『原初年代記』ではコンスタンチヌス帝に対する言葉として「私がスーダにいたように」と記されているのである。スーダはもちろんボスフォロスのガラタ付近の

¹² まず、515年にVitalien 将軍によるアナスタシウス一世に対する攻撃の際で、軍団は＜聖ママス＞まで敗走した。つぎに、716年には、アナスタシウス二世の代わりにテオドロス三世を擁立しようとしたOpsikionの軍団との戦いで、アナスタシウス二世の艦隊はこの港に停泊している。最後に、742年に、アルメニアのArtavasdusがコンスタンチヌス5世の不在中にコンスタンチノーブルを占領し、＜聖ママス＞に司令部をおいた。

¹³ Oxford Dictionary of Byzantium, 312

港を指す語であるが、先に述べたように、＜聖ママス＞居住区が公的性格を帯びたルーシの通商団の宿舍となっていた以上、9月と10月の少なくとも二回コンスタンチヌス・ポリュピロゲネトスと対面し、長期にわたってコンスタンチノーブルに滞在したオリガがその間ずっと不自由な船上生活を続けたと考えるよりは、自国の公式な宿舍である＜聖ママス＞に滞在したと考えるほうがより自然であろう。

以上のように、断片的にせよしばしば歴史の舞台にその姿をあらわしている＜聖ママス＞だが、修道院を含めてその地区の正確な位置はいまだ明らかになっていない。現在のところ、もっとも妥当と思われる見解はパルゴワのものであろう¹⁴。それによると、＜聖ママス＞は金角湾あるいはガラタの北西にあり、かつ聖フォカス（現オルタキョイ）の南に位置し、しかもスクタリ（現ユスキュダル）の対岸にある。この条件にあてはまるのは、現在のベシクタシュ地区であるとされる。一方、オックスフォードの『ビザンツ辞典』では、この地区とはほぼ同じ位置ではあるが、さらに一層ボスフォラス海峡沿いにあるドルマバチュ地区に同定している¹⁵。そのいずれがより正確であるのかは判断できないが、いずれにしても、ボスフォロス海峡の西岸の地域で、ガラタ橋から約3キロの地点である。この位置は城砦で囲まれた町から比較的離れていて、しかも金角湾を隔てて水路の反対側にあるということで、人の出入りの監視も容易であり、「50人づつ、武器を持たずに」という厳しい入城の条件をつけたビザンツ側にとってはその意図に添った、首都防衛の見地からも好ましい居留地であったと思われる。

ところで、このロシア人居住区に滞在したのはかならずしも通商目的でコンスタンチノーブルに来た商人に限定されていたわけではない。

『原初年代記』の907年の項には、先の引用に続けて、

Аще приидуть русь бус купши, да не взимают мѣсячины

（もしルーシが商業目的でなければ、月々の割り当ては与えない）¹⁶

と記されている。このことは、通商目的以外でもコンスタンチノー

¹⁴ R.P.Pargoire, op. cit. 203-4

¹⁵ Oxford Dictionary of Byzantium, p.312

¹⁶ Л.С.Лихачев, Л.А.Дмитриев, op. cit. 44

ブルにやって来るルーシが存在したということを意味している。巡礼もその一つであろう。コンスタンチノーブルはまた聖なる町として巡礼にとってもきわめて重要な町であった。その記録である巡礼記は12-17世紀頃までにその数70を超え¹⁷、ロシア文学の流れの中で一つの文学ジャンルを形成している。巡礼記という形で現在に残っているのは12世紀初頭からであるが、巡礼そのものはすでに10世紀頃から盛んに行われていたとされる¹⁸。手に杖を持ち、肩から袋を下げて聖地を巡礼する人々は教会によって組織され、グループを組んで巡礼をするものが多く、1106年から1108年までの巡礼を記録した『ダニイルの巡礼記』の場合もグループ旅行であった¹⁹。こういった巡礼者たちにとっても、同郷人が多数集まる<聖ママス>居住区に足を向けることはきわめて自然ななりゆきであったと推定することは無理がないであろう。

このようにして、ミハイル三世が暗殺された867年から、『原初年代記』に登場する907年の間の一時期、おそらくは9世紀末頃からルーシの滞在場所として使用されるようになった<聖ママス>居住区は、たんに通商使節団の逗留地としての役割だけでなく、様々な情報が交わされる情報センターとして、さらにはビザンツとキエフ・ルーシの直接的な文化交流の場としての機能を果たしていたと考えられる。ビザンツ帝国では、この時期はまさにマケドニア・ルネッサンスと呼ばれる経済的・政治的な繁栄期にあたり、洗練された文化の黄金時代を迎えていた。その輝かしい文化の一端は、とうぜんこの居住区を通じて直接ルーシの地に流入した。その中にはおそらく、キリスト教との結び付きを強め、キリスト教を受容する方向にあったルーシにとって関心の的であるキリスト教関連文献を中心とするギリシヤ語文献が多数含まれていたと推測しうる。

『原初年代記』の記述にもあるように²⁰、1043年ヤロスラフ公はその子ヴラジーミルをビザンツ遠征にあたらせた。しかし、この遠征はルーシ側の敗退に終わり、これ以降ルーシからビザンツへの遠征は行なわれていない。さらに、11世紀後半になると、ステップに出

¹⁷ П. И. Прокофьев, *Книга хождений*, М. 1984, 6.

¹⁸ *ibid.*

¹⁹ *ibid.*, 5.

²⁰ Л. С. Лихачев, Л. А. Дмитриев, *op. cit.* 168.

没してルーシとの間で攻防を繰り返していた遊牧民ボロヴェツによってキエフ・ルーシからビザンツへの通商路であったドニェプル水系の出口がおさえられてしまった²¹。一方、1018年には、第一次ブルガリア帝国が崩壊し、ビザンツ帝国に併合されると、多数のブルガリア人聖職者・知識人がキエフ・ルーシに亡命し、ブルガリアを経由したビザンツ文化を伝えた。これにより、モラビアからブルガリアに移っていた聖職者を中心とする文化集団がそのままキエフ・ルーシへと大移動した。これを受けて、ヤロスラフ公（在位1019-54）のもと、キエフの町で積極的な翻訳活動が行われるようになり、キエフ・ルーシの文化は黄金時代を迎えることになる。これらのことを総合すると、おそらく11世紀前半には、文化摂取という面でのコンスタンチノーブルの＜聖ママス＞居住区に対する依存度が相対的に低くなっていったと推測される。しかし、一世紀あまりという限られた期間ではあるが、ロシアのビザンツからの文化摂取、さらにはその後のロシアの文化発展にとって、コンスタンチノーブルにあったロシア居住区が果たした役割は大きく、看過することは出来ない。

²¹ 森安達也『ビザンツとロシア・東欧』、東京、1985、221。